

「フェストの前に立つパウロ」

使徒 25：1～12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ペリクスは、パウロの話に興味を持った。
- ②パウロは、死者の復活こそ主要なテーマであることを示した。
- ③ペリクスは妻のドルシラとともに、何度もパウロから話を聞いた。
- ④パウロは彼らに福音を伝えたが、彼らは応答しなかった。
- ⑤カイザリヤでのパウロの幽閉は、2 年も続いた。
- ⑥2 年経ったとき、ローマ本国は、ユダヤ総督ペリクスを罷免した。
- ⑦ユダヤ人と異邦人の紛争が起こり、ペリクスは多くのユダヤ人たちを虐殺した。
- ⑧ポルキオ・フェストが後任に任命された。
- ⑨しかしペリクスは、パウロを幽閉したままにしておいた。

*ユダヤ人に恩を売っておく必要があった。

⑩使 24：27

Act 24:27 二年たって後、ポルキオ・フェストがペリクスの後任になったが、ペリクスはユダヤ人に恩を売ろうとして、パウロを牢につないだままにしておいた。

- ⑪今回の聖書箇所は、今後のパウロの動きを規定する重要な箇所である。

*パウロは、ローマに向かう。

(2) アウトライン

- ①新総督フェストの着任（1～5 節）
- ②フェストによる裁判（6～8 節）
- ③カイザルへの上訴（9～12 節）

結論：

- (1) ペリクスとフェストの特徴
- (2) イエスの裁判とパウロの裁判

フェストによる裁判について学ぶ。

I. 新総督フェストの着任（1～5 節）

1. 1 節

Act 25:1 フェストは州総督として着任すると、三日後にカイザリヤからエルサレムに上った。

(1) フェストに関する情報

①紀元 59～61 年に、ユダヤ総督であった（ヨセフスの記録）。

＊皇帝ネロによる任命であった。

＊カイザリヤはシリア州の首都で、ユダヤはシリア州の一部である。

②フェストに関する情報は少ないが、前任のペリクスよりは高く評価されている。

＊ペリクスは暴力で統治したが、フェストは知恵で統治しようとした。

(2) 彼は、総督の居住地であるカイザリヤから、エルサレムに上った。

①彼は、エルサレム統治の難しさを理解していた（予想不能な町）。

②そこで、着任して 3 日後にエルサレムに上った。

＊賢明な統治の姿勢が反映されている。

＊エルサレムの重鎮たちと平和な関係を維持する必要があった。

2. 2～3 節

Act 25:2 すると、祭司長たちとユダヤ人のおもだった者たちが、パウロのことを訴え出て、

Act 25:3 パウロを取り調べる件について自分たちに好意を持ってくれるように頼み、パウロをエルサレムに呼び寄せていただきたいと彼に懇願した。彼らはパウロを途中で殺害するために待ち伏せをさせていた。

(1) ユダヤ人の指導者たちは、パウロのことを訴え出た。

①大祭司はアナニヤからイシュマエルに代わっていた。

②大祭司も総督も新任なので、改めてパウロの裁判を申し出るチャンスである。

③彼らは、ローマによる裁判では、パウロを有罪にすることはできないと考えた。

(2) パウロをエルサレムに呼び寄せて裁判をして欲しいと願った。

①彼らは、サンヘドリンによる裁判を希望したのであろう。

②彼らの真意は、移動の途中でパウロを殺害することであった。

③途中で待ち伏せする人員を配置していた。

＊使 23：12～15 で同じような陰謀が企てられ、40 人が誓約に加わった。

④2 年経っても、ユダヤ人たちのパウロに対する憎しみは消えていなかった。

＊負のエネルギーで生きていると、品性が卑しくなる。

3. 4～5 節

Act 25:4 ところが、フェストは、パウロはカイザリヤに拘置されているし、自分はまもなく出発の予定であると答え、

Act 25:5 「だから、その男に何か不都合なことがあるなら、あなたがたのうちの有力な人た

ちが、私といっしょに下って行って、彼を告訴しなさい」と言った。

- (1) フェストは、事前にかんりの情報を得ていた。
 - ①パウロは殺されそうになった。
 - ②千人隊長は彼を保護し、カイザリヤに護送した。
 - ③ユダヤ人たちの訴えには、証拠が伴っていない。
 - ④パウロをエルサレムに移動させれば、途中で危険が待っている。
- (2) フェストは、知恵ある判断を下した。
 - ①パウロはすでにカイザリヤにいる。
 - ②自分も間もなくカイザリヤに向かって出発する予定である。
 - ③ユダヤ人たちが自分といっしょにカイザリヤに下って行くのが筋である。
 - ④そうすれば、カイザリヤでパウロの裁判を行おう。

Ⅱ. フェストによる裁判（6～8 節）

1. 6 節

Act 25:6 フェストは、彼らのところに八日あるいは十日ばかり滞在しただけで、カイザリヤへ下って行き、翌日、裁判の席に着いて、パウロの出廷を命じた。

- (1) フェストは、エルサレムに約 10 日間滞在した。
 - ①この日数は、当面の仕事を終えるために必要なものである。
- (2) カイザリヤに着くと、翌日、パウロの裁判を行った。
 - ①「**裁判の席**」とは、「裁きの座」(the judgment seat) のことである。
*通常は、公の場に設置された裁判長の席である。
 - ②パウロの出廷が命じられた。
*パウロにとっては、フェストに伝道するチャンスである。

2. 7 節

Act 25:7 パウロが出て来ると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは、彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立てたが、それを証拠立てることはできなかった。

- (1) ルカは、裁判の内容を要約している。
 - ①裁判の進み方は、ペリクスによる裁判と同じであったのだろう。
 - ②ユダヤ人たちは、パウロの罪状を申し立てた。
 - ③ルカは、「**多くの重い罪状**」とだけ書いている。
 - ④弁護士テルトロが申し立てた内容の繰り返しであろう（使 24：5～6）。

*ユダヤ人の律法に対する罪

*宮に対する罪

*カイザルに対する罪

⑤しかし、ユダヤ人たちは証拠を示すことができなかった。

⑥また、証人を立てることもできなかった。

3. 8 節

Act 25:8 しかしパウロは弁明して、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪も犯してはおりません」と言った。

(1) ユダヤ人たちの訴えが弱いので、パウロは全否定をするだけでよかった。

①訴えられている 3 つの罪を否認した。

②「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪も犯してはおりません」

Ⅲ. カイザルへの上訴 (9～12 節)

1. 9 節

Act 25:9 ところが、ユダヤ人の歓心を買おうとしたフェストは、パウロに向かって、「あなたはエルサレムに上り、この事件について、私の前で裁判を受けることを願うか」と尋ねた。

(1) フェストには、これ以降の裁判の進め方が分からなかった。

①そこで、新任の総督としてユダヤ人たちの気持ちを忖度した。

(2) 彼は、パウロにつまらない質問をした。

①「あなたはエルサレムに上り、この事件について、私の前で裁判を受けることを願うか」

②これは、エルサレムで裁判をしないという自らの判断を変更したものである。

③総督フェストがパウロの承認を求めたのは、パウロがローマ市民だからである。

*有罪判決が出ていないローマ市民の人権は、尊重しなければならない。

2. 10～11 節

Act 25:10 すると、パウロはこう言った。「私はカイザルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。あなたもよくご存じのとおり、私はユダヤ人にどんな悪いこともしませんでした。

Act 25:11 もし私が悪いことをして、死罪に当たることをしたのであれば、私は死をのがれようとはしません。しかし、この人たちが私を訴えていることに一つも根拠がないとすれば、

だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイザルに上訴します。」

(1) パウロは、フェストの提案を拒否した。

- ①エルサレムでは、より厳しい裁判になることが予想された。
- ②自分にはローマの法廷で裁判を受ける権利がある。
- ③自分は無罪なのだから、ユダヤ人たちに引き渡されることはあり得ない。

(2) 「私はカイザルに上訴します」

- ①ローマ市民には、下級裁判所で不当な扱いを受ける可能性がある場合、カイザルに上訴する権利があった。
- ②殺人、海賊、強盗などの現行犯には、この権利はなかった。
- ③ネロが皇帝であったが、統治の前半（54～62 年）だったので、穏健であった。
*パウロには、ネロを恐れる理由がなかった（59 年頃）。
- ④紀元 62 年以降、ネロはキリスト教徒を迫害する残忍な皇帝となる。
- ⑤パウロは、カイザリヤ脱出の唯一の方法が、上訴だと感じたのであろう。

3. 12 節

Act 25:12 そのとき、フェストは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「あなたはカイザルに上訴したのだから、カイザルのもとへ行きなさい。」

(1) これはフェストには好都合であった。

- ①ユダヤ人との関係について悩まなくてもよくなる。
- ②彼は、陪審の者たちと協議し、喜んでパウロの申し出を受け入れた。

(2) 本来は、パウロは無罪なのだから、釈放すべきである。

①使 26 : 32

Act 26:32 またアグリッパはフェストに、「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに」と言った。

- ②しかしフェストは、パウロを釈放しなかった。
- ③このことが、使 23 : 11 の成就につながった。

Act 23:11 その夜、主がパウロのそばに立って、「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない」と言われた。

結論

1. ペリクスとフェストの特徴

(1) とともに、矛盾した性質を内に宿していた。

(2) ペリクス

- ①パウロの語る福音に興味を示した。
- ②と同時に、パウロから賄賂を受け取ろうとした。

(3) フェスト

- ①善良な総督というイメージの提示に腐心した。
- ②パウロの裁判においては、ユダヤ人を優遇した。
- (4) 両者ともに、大祭司やユダヤ人の指導者たちを怒らせることを恐れた。
- (5) そういう状況下にあっても、パウロは福音を伝えた。
- ①神は、いかなる場合でもご自身のしもべを用いることができる。

(2) イエスの裁判とパウロの裁判

(1) イエスの裁判

- ①ルカ 23：1～56
- ②裁判の経過
 - *ピラトによる裁判
 - *ヘロデ・アンティパスによる裁判
 - *ピラトによる裁判

(2) パウロの裁判

- ①使 24～26 章
- ②裁判の経過
 - *ペリクスによる裁判
 - *フェストによる裁判
 - *ヘロデ・アグリッパⅡ世による裁判

(3) ルカ 14：27

Luk 14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

(4) 2 コリ 4：10～11

2Co 4:10 いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

2Co 4:11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されていますが、それは、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において明らかに示されるためなのです。

(5) 2 テモ 3：12

2Ti 3:12 確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

「アグリッパ王の前に立つパウロ（1）」

使徒 25：13～27

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ペリクスの後任として、ポルキオ・フェストがユダヤ総督として赴任して来た。
- ②フェストは、カイザリヤに到着した3日後に、エルサレムを訪問した。
- ③ユダヤ人の指導者たちは、パウロをエルサレムで裁くことを要請した。
*エルサレムに上る途中でパウロを暗殺するためであった。
- ④フェストは、ユダヤ人たちがカイザリヤに下ってくれば裁判をすると応答した。
- ⑤カイザリヤでの裁判でも、パウロが無罪であることは明らかであった。
- ⑥フェストはパウロに、エルサレムに上って裁判を受けることを願うかと尋ねた。
- ⑦パウロは、「私はカイザルに上訴します」と答えた。
- ⑧使 25：12

Act 25:12 そのとき、フェストは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「あなたはカイザルに上訴したのだから、カイザルのもとへ行きなさい。」

(2) アウトライン

- ①アグリッパ王とベルニケの来訪（13～14 節 a）
- ②フェストによる問題の分かち合い（14b～22 節）
- ③聴聞の前説（23～27 節）

結論：

- (1) ルカの執筆目的は何か。
- (2) 中心人物は誰か。
- (3) 中心テーマは何か。

アグリッパ王の前での聴聞について学ぶ。

I. アグリッパ王とベルニケの来訪（13～14 節 a）

1. 13 節

Act 25:13 数日たってから、アグリッパ王とベルニケが、フェストに敬意を表するためにカイザリヤに来た。

- (1) アグリッパ王と妹のベルニケが、フェストを表敬訪問するためにやって来た。
 - ①アグリッパはローマによって任命された王である。
 - ②近隣の総督の着任を歓迎するのは、当然のことである。

(2) アグリッパ王について

- ①彼は、ヘロデ・アグリッパⅡ世である。
- ②彼の父は、ヘロデ・アグリッパⅠ世である。
 - *彼は、ヤコブを殺し、ペテロも殺そうとしたが失敗した（使12章）。
 - *カイザリヤに下り、そこで演説している間に「虫にかまれて」死んだ。
- ③大叔父（父の叔父）は、ヘロデ・アンティパスである。
 - *彼は、バプテスマのヨハネの首をはねた（マタ14章）。
 - *彼は、イエスを裁いた（ルカ23章）。
- ④曾祖父は、ヘロデ大王である。
 - *彼は、ベツレヘムの2歳以下の男の子を殺した。
- ⑤父が死んだ時、ヘロデ・アグリッパⅡ世は17歳であった。
 - *妹のベルニケは16歳、ペリクスの妻ドルシラは6歳であった。
- ⑥彼は、ローマで教育を受け、皇帝クラウドから好感を抱かれていた。
 - *また、ユダヤ人史家ヨセフスとの親交もあった。
- ⑦アグリッパは、当時30歳前後で、ガリラヤ地方の王であった。
 - *エルサレムの神殿の管理者であり、大祭司の任命権も持っていた。
 - *ユダヤ人たちにとっては、彼はローマの操り人形に過ぎなかった。
- ⑧ヘロデ王朝の中では、最も評判の良い人物である（ヘロデ王朝の最後の人物）。

(3) ベルニケについて

- ①初婚は、叔父との結婚であったが、若くして夫と死別した。
- ②その後、兄アグリッパと同棲した（近親結婚の様相を呈していた）。
- ③最後は、エルサレムを滅ぼした将軍ティトスの妻となった。
- ④ペリクスの妻ドルシラは、アグリッパとベルニケの妹である。

2. 14節 a

Act 25:14a ふたりがそこに長く滞在していたので、フェストはパウロの一件を王に持ち出してこう言った。

(1) フェストが抱えていた問題

- ①パウロをカイザルの元へ送る際に、どのような法的理由を付けるか分からない。
- ②ユダヤ人たちが告発する理由は、すべて宗教的なものである。

(2) アグリッパ王に相談する理由

- ①彼は、ローマ法に精通している。

- ②ローマによって任命された王である。
- ③ユダヤ人（イドマヤ人）なので、ユダヤ教にも詳しい。
- ④また、神殿の管理者であり、大祭司の任命権者でもある。

II. フェストによる問題の分かち合い（14b～22節）

1. 14b～16

Act 25:14b 「ペリクスが囚人として残して行ったひとりの男がおります。

Act 25:15 私がエルサレムに行ったとき、祭司たちとユダヤ人の長老たちが、その男のことを私に訴え出て、罪に定めるように要求しました。

Act 25:16 そのとき私は、『被告が、彼を訴えた者の面前で訴えに対して弁明する機会を与えられないで、そのまま引き渡されるということはローマの慣例ではない』と答えておきました。

(1) これまでの出来事の要約

- ①ペリクスが囚人として残して行ったひとりの男がいる。
- ②ユダヤ人たちは、正当な手続きを経ないで、彼を有罪にするように要求した。
- ③フェストは、自分のことを「ローマ法の擁護者」として印象づけた。

2. 17～19節

Act 25:17 そういうわけで、訴える者たちがここに集まったとき、私は時を移さず、その翌日、裁判の席に着いて、その男を出廷させました。

Act 25:18 訴えた者たちは立ち上がりましたが、私が予期していたような犯罪についての訴えは何一つ申し立てませんでした。

Act 25:19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです。

(1) 裁判では、その男を有罪にする証拠がなにも出て来なかった。

- ①ローマに対する反逆の罪は、見つからなかった。
- ②争点は、彼ら自身の宗教に関することである。

(2) パウロが神殿を汚しているという最初の訴えは、後退した。

- ①死者の復活のテーマが全面に出て来た。
- ②パウロは、イエスが死者の中から復活したと主張している。

* サドカイ派は、死者の復活を否定していた。

* パリサイ派は、終わりの時にすべての死者が復活すると教えていた。

3. 20～21 節

Act 25:20 このような問題をどう取り調べたらよいか、私には見当がつかないので、彼に『エルサレムに上り、そこで、この事件について裁判を受けたいのか』と尋ねたところが、

Act 25:21 パウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと願い出たので、彼をカイザルのもとに送る時まで守っておくように、命じておきました。」

(1) フェストは、自らの無知を率直に認めた。

①アグリッパ王の助言が必要である。

(2) 自分はパウロに、エルサレムで裁判を受けたいかと尋ねた。

①ユダヤ人の気持ちを配慮したという点は、隠した。

②自分はユダヤの律法に無知であるということを理由にした。

4. 22 節

Act 25:22 すると、アグリッパがフェストに、「私も、その男の話を聞きたいものです」と言ったので、フェストは、「では、明日お聞きください」と言った。

(1) アグリッパは、キリスト教に関してパウロから直接情報を得たいと願った。

①大叔父のヘロデ・アンティパスも、イエスから直接話を聞きたいと願った。

Ⅲ. 聴聞の開始 (23～27 節)

1. 23 節

Act 25:23 こういうわけで、翌日、アグリッパとベルニケは、大いに威儀を整えて到着し、千人隊長たちや市の首脳者たちにつき添われて講堂に入った。そのとき、フェストの命令によってパウロが連れて来られた。

(1) フェストは、この聴聞をアグリッパとベルニケを祭り上げるための機会とした。

①アグリッパとベルニケは、大いに威儀を整えて（盛装で）到着した。

②カイザリヤに駐留していた5人の千人隊長たちが付き添っていた。

③市の首脳たちも付き添っていた（大半が異邦人）。

④彼らは、総督の宮廷内にある講堂に入って来た。

⑤最後に、パウロが鎖につながれて連れて来られた。

(2) ルカは招待客ではなかったが、そこにいたと思われる。

①パウロの友人たちが、パウロの世話をすることは許可されていた。

②ルカは、カイザリヤでの裁判の記録を直接収集することができた。

2. 24～25 節

Act 25:24 そこで、フェストはこう言った。「アグリッパ王、ならびに、ここに同席の方々。ご覧ください。ユダヤ人がこぞって、一刻も生かしてはおけないと呼ばわり、エルサレムでも、ここでも、私に訴えて来たのは、この人のことです。

Act 25:25 私としては、彼は死に当たることは何一つしていません。しかし、彼自身が皇帝に上訴しましたので、彼をそちらに送ることに決めました。

(1) フェストの前説

①ユダヤ人たちが訴えて来たのは、この人である。

②自分としては、彼は無罪だと思う。

*これは、重要な情報である。フェストもパウロが無罪であることを認めた。

③しかし、彼が皇帝に上訴したので、彼をローマに送ることにした。

3. 26～27 節

Act 25:26 ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事がらが一つもないのです。それで皆さんの前に、わけてもアグリッパ王よ、あなたの前に、彼を連れてまいりました。取り調べをしてみたら、何か書き送るべきことが得られましょう。

Act 25:27 囚人を送るのに、その訴えの箇条を示さないのは、理に合わないと思うのです。」

(1) フェストの前説（続き）

①その場合、訴えの内容を書いて皇帝に送る必要がある。

*当時の皇帝は、ネロである。

②アグリッパなら、具体的な罪状を上げてくれるに違いない。

③訴えの箇条を示さないなら、総督としての能力が疑われる。

結論

1. ルカの執筆目的は何か。

(1) パウロが無罪であることを、3方向から証明した。

①ユダヤ総督たちが、パウロは無罪であると判断した。

②ローマによって任命された王が、パウロは無罪であると判断した。

③5人の千人隊長と市の重鎮たちの前で、パウロが無罪であることが示された。

2. 中心人物は誰か。

(1) フェストが中心人物ではない。

(2) 千人隊長たちや市の首脳者たちでもない。

(3) アグリッパとベルニケでもない。

①彼らは、虚飾と虚栄を身にまとしてこの場に登場した。

(4) パウロは、鎖につながれた囚人として登場した。

①ルカは、アグリッパとベルニケの2人とパウロを対比させている。

②歴史を動かすのは、鎖につながれた囚人である。

③パウロは、イエス・キリストの福音のために囚人となっている。

④パウロは、真理のために囚人となっている。

3. 中心テーマは何か。

(1) ローマの高官を指す2つの言葉

①使 25 : 21

Act 25:21 パウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと願い出たので、彼をカイザルのもとに送る時まで守っておくように、命じておきました。」

*皇帝＝セバストス＝アウグストス

②使 25 : 25

Act 25:25 私としては、彼は死に当たることは何一つしていません。しかし、彼自身が皇帝に上訴しましたので、彼をそちらに送ることに決めました。

*皇帝＝キュリオス＝主

*アウグストとテベリオは、「キュリオス」を称号とすることを拒否した。

*自分を神の位に引き上げることだと感じたからである。

*ネロは、この称号を受け入れた。当時は、善良な皇帝であった。

(2) パウロは、総督や王たちに向かって、彼の主を宣べ伝えた。

①使 25 : 19

Act 25:19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです。

*フェストは、「イエスという者」と言った。ここに彼の悲劇がある。

*これは、イエスとパウロに対する軽蔑の言葉である。

②パウロが歴史を動かした理由は、彼が語ったメッセージの内容にある。

③イエスは死者の中から甦り、今も生きておられる。

④1 コリ 12 : 3

1Co 12:3 ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です」と言うことはできません。

「アグリッパ王の前に立つパウロ（2）」

使徒 26：1～18

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ペリクスの後任として着任したフェストは、パウロの処置について悩んでいた。
- ②アグリッパ王とベルニケが表敬訪問のためにカイザリヤにやって来た。
- ③フェストは、アグリッパ王にパウロの取り調べを依頼した。
 - *アグリッパは、ローマ法に精通していた。
 - *また、ユダヤ教を熟知していた。
 - *彼は、神殿の管理者であり、大祭司の任命権者であった。
- ④パウロをカイザルに送る際に、理由を書いた手紙を付ける必要があった。
- ⑤これはパウロの裁判ではない。
 - *カイザルに上訴したので（25：11）、次の裁判はカイザルの前で行われる。
 - *これは、新しい情報を得るために行われる聴聞である。
 - *フェストは、アグリッパにパウロを聴聞する権利を与えた。
- ⑥パウロは、法的に自分を弁護する必要はない。
- ⑦彼はこの機会を捉え、アグリッパに伝道メッセージを語る。
- ⑧使 9：15

Act 9:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」

- *パウロは、3つのグループに語りかける。
- *異邦人たち、王たち、イスラエルの子孫

(2) アウトライン

- ①パウロの弁明（1～8 節）
- ②パウロの回心体験（9～18 節）
- ③パウロの宣教（19～23 節）
- ④フェストの応答（24～26 節）
- ⑤アグリッパの応答（27～32 節）

結論：

- (1) この弁明の位置づけ
- (2) この弁明の中心テーマ

アグリッパ王の前での聴聞について学ぶ（2）

I. パウロの弁明（1～8節）

1. 1節

Act 26:1 すると、アグリッパがパウロに、「あなたは、自分の言い分を申し述べてよろしい」と言った。そこでパウロは、手を差し伸べて弁明し始めた。

（1）「手を差し伸べて」

- ①当時の弁舌家の姿勢である。
- ②腕が鎖につながれているので、よりドラマチックな印象がある。

2. 2～3節

Act 26:2 「アグリッパ王。私がユダヤ人に訴えられているすべてのことについて、きょう、あなたの前で弁明できることを、幸いに存じます。

Act 26:3 特に、あなたがユダヤ人の慣習や問題に精通しておられるからです。どうか、私の申し上げることを、忍耐をもってお聞きくださるよう、お願いいたします。

（1）アグリッパ王に対して敬意を表している。

- ①あなたの前で弁明できることを、幸いに思う。
- ②あなたは、ユダヤ人の慣習や問題に精通しておられる。
 - *パウロは誠実にこれを語っている。
 - *彼にとっては、願っていた状況がやって来たのである。
- ③私の申し上げることを、忍耐をもってお聞きくださるように。
 - *これから語る証言は、手短なものではなく詳細なものだという予告である。

3. 4～6節

Act 26:4 では申し述べますが、私が最初から私の国民の中で、またエルサレムにおいて過ごした若い時からの生活ぶりは、すべてのユダヤ人の知っているところです。

Act 26:5 彼らは以前から私を知っていますので、証言するつもりならできることですが、私は、私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活してまいりました。

Act 26:6 そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。

（1）若い頃のユダヤ教徒としての生活

- ①「私の国民の中で」とは、タルソでの生活であろう。
- ②エルサレムでの生活は、律法の学びが中心であった。
- ③それらのことは、ユダヤ人の間では有名なことである。

（2）ユダヤ教の最も厳格な派に従った生活

- ①パウロは、パリサイ人であった。
- ②ユダヤ人たちは、かつてのパウロの生活について証言することができる。

(3) パウロが裁判を受けている理由

- ①「神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいること」が理由。
- ②つまり、メシアによる救いを待ち望んでいることが、迫害を受ける理由である。
- ③この希望は、預言者たちが預言していたものである。

＊個人的な救いと、国家的な解放と祝福

4. 7～8 節

Act 26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです。

Act 26:8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととされるのでしょうか。

(1) イスラエル 12 部族

- ①パウロは、北の 10 部族が失われてとは思っていない。
- ②日本に日ユ同祖論というものがあるが、イギリスにも同様の考え方がある。
- ③北の 10 部族は失われてはいない。

＊マタ 19 : 28、ルカ 22 : 30、ヤコ 1 : 1、黙 7 : 4～8、21 : 12 参照

(2) 彼らは熱心に神に仕えながら、約束のものを得たいと願っている。

- ①救いは油注がれた方、死者の中から復活された方、によってもたらされる。
- ②復活が信じられないなら、イエスがメシアであることも信じられない。
- ③しかし、神に不可能はないのだから、復活も可能である。

(3) パウロの希望は、真空状態からではなく、ユダヤ教から生まれたものである。

- ①ところが、彼はまさにこのユダヤ的希望のゆえに訴えられているのである。
- ②ユダヤ人たちは、この希望が与えられたとき、それを拒否した。

II. パウロの回心体験（9～18 節）

1. 9～11 節

Act 26:9 以前は、私自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました。

Act 26:10 そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。

Act 26:11 また、すべての会堂で、しばしば彼らを罰しては、強いて御名をけがすことばを言わせようとし、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを追跡して行きました。

(1) 以前の信仰

- ①ナザレのイエスがメシアであることを信じられなかった。
- ②それどころか、強硬に敵対すべきだと考えていた。
- ③それをエルサレムで実行した。
- ④祭司長たちから授けられた権限を用いて、多くの聖徒たちを投獄した。
- ⑤また、死刑判決に賛成票を投じた。
 - *サンヘドリンの決定に同意した。
- ⑥すべての会堂で、彼らを罰し、御名を汚す言葉を言わせようとした。
 - *イエスは神でないと言わせる。
 - *イエスは呪われよと言わせる。
- ⑦さらに、怒りに燃えて、国外にまで追跡の手を広げることになった。

2. 12～14 節

Act 26:12 このようにして、私は祭司長たちから権限と委任を受けて、ダマスコへ出かけて行きますと、

Act 26:13 その途中、正午ごろ、王よ、私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と同行者たちとの回りを照らしたのです。

Act 26:14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき声があつて、ヘブル語で私にこう言うのが聞こえました。『サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。』

(1) パウロのダマスコ体験（これまでになかった2種類の情報がある）

- ①「私たちはみな地に倒れましたが、」
 - *天からの光に照らされて、パウロの同行者たち全員が地に倒れた。
 - *この光は単なる幻ではなく、現実の力であった。
- ②その声は、ヘブル語で語りかけてきた。
 - *ユダヤ人なら、「サウロ」という名がヘブル語であることは分かる。
 - *異邦人はそうではないので、ヘブル語でという解説が付けられた。
 - *このお方がイスラエルの神であることが、暗示されている。

(2) 「とげのついた棒をける」

- ①権威に逆らうことを示す格言である。
- ②家畜をならすために、牧者はとげのついた棒を用いた。

③家畜は、痛い体験を通して主人への従順を学ぶ。

④パウロにとっては、クリスチャンを迫害するのは自分を傷つけることであった。

3. 15～18節

Act 26:15 私が『主よ。あなたはどなたですか』と言いますと、主がこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

Act 26:16 起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

Act 26:17 わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

Act 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』

(1) パウロは、3種類の主からの語りかけを、ひとまとめにして語っている。

- ①ダマスコ途上で直接イエスから聞いたことば
- ②アナニヤを通して届けられた主イエスのことば
- ③エルサレムの宮で祈っていたときに見た幻の中でのことば

(2) パウロは、自分が異邦人に遣わされた使徒であることを強調した。

- ①異邦人の聴衆の好感を得るためである。

結論

1. この弁明の位置づけ

(1) この弁明は、使徒の働きの中の5番目、最後のものである。

- ①使 22：1～21 神殿で（ユダヤ人たちに向かって）
- ②使 23：1～8 エルサレムで（サンヘドリンに向かって）
- ③使 24：10～21 カイザリヤで（総督ペリクスに向かって）
- ④使 25：6～11 カイザリヤで（総督フェストに向かって）
- ⑤使 26：1～32 カイザリヤで（アグリッパ王に向かって）

(2) この弁明は、使徒の働きの中の弁論のクライマックスである。

- ①パウロの伝道メッセージである。
- ②量的に最も長い。

2. この弁明の中心テーマ

(1) 使 26 : 17～18

Act 26:17 わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

Act 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』

①主がパウロに語ったことばは、メシアの使命を預言したものと似ている。

*イザ 35 : 5、42 : 7、42 : 16、61 : 1

②パウロの奉仕は、やがてメシアが地上で行うことの予表である。

(2) パウロの使命（福音の力の伝達）

①霊的に盲目な人たちの目を開く。

②サタンに支配されている人たちを解放する。

③イエスを信じる信仰によって、罪の赦しを得させる。

④聖徒たちとともに相続に与らせる。

*ロマ 8 : 17

Rom 8:17 もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人でもあります。

「アグリッパ王の前に立つパウロ（3）」

使徒 26：19～32

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①フェストは、アグリッパ王にパウロの取り調べを依頼した。
- ②パウロをカイザルに送る際に、理由を書いた手紙を付ける必要があった。
- ③これはパウロの裁判ではない。
 - *カイザルに上訴したので（25：11）、次の裁判はカイザルの前で行われる。
 - *これは、新しい情報を得るために行われる聴聞である。
- ④パウロはこの機会を捉え、アグリッパに伝道メッセージを語る。

(2) アウトライン

- ①パウロの弁明（1～8 節）
- ②パウロの回心体験（9～18 節）
- ③パウロの宣教（19～23 節）
- ④フェストの応答（24～26 節）
- ⑤アグリッパの応答（27～32 節）

結論：

- (1) 天からの啓示の内容
- (2) 啓示への応答

アグリッパ王の前での聴聞について学ぶ（3）

Ⅲ. パウロの宣教（19～23 節）

1. 19～20 節

Act 26:19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、
Act 26:20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めてふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。

(1) 「天からの啓示にそむかず」

- ①「天からの幻」（新改訳 2017）
- ②「天から示されたこと」（新共同訳）
- ③「天よりの啓示」（口語訳）
- ④「天よりの顕示（しめし）」（文語訳）

⑤敬虔なパリサイ人であるパウロには、神の啓示に従うしか選択肢はない。

(2) 使 26 : 17～18

Act 26:17 わたしは、この民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

Act 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。』

(3) パウロの奉仕の広がり

- ①ダマスコにいる人々、エルサレムにいる人々、ユダヤの全地方、さらに異邦人
- ②これは、時間順にならべたものではない。
- ③先ずユダヤ人に、次の異邦人という伝道の原則に基づいた描写である。
- ④ユダヤ人も異邦人も、ともに悔い改めが必要である。

(4) 「悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするように」

- ①悔い改めとは、方向転換である。罪の生活から神への立ち返りである。
- ②立ち返りの証拠が、正しい行いである。

2. 21 節

Act 26:21 **そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。**

(1) 「そのために」とは、異邦人伝道のことである。

- ①パウロは、異邦人はユダヤ教徒を通過しなくても信仰だけで救われると教えた。
- ②この教えが、ユダヤ人たちの怒りを買った。
- ③パウロは、「アグリッパ王よ、ひどいと思われませんか」と言っているのである。

3. 22～23 節

Act 26:22 こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。

Act 26:23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人ともに最初に光を宣べ伝える、ということです。」

(1) 「こうして」は、「しかし」という訳の方がよい。

- ①神の守りがあったので、今日まで宣教活動を継続して来た。

*これは、パウロの実感である。

- ②「小さい者にも大きい者にも」

＊若い者にも年配者にも

＊身分の低い者にも高い者にも

(2) 語って来た内容は、ユダヤ人の預言者たちが預言してきたことだけである。

①キリストは苦しみを受ける。

②死者の中から復活する。

＊「死者の中から最初に復活し、」（新改訳 2017）

③ユダヤ人にも異邦人にも、光を宣べ伝える。

IV. フェストの応答（24～26 節）

1. 24 節

Act 26:24 パウロがこのような弁明していると、フェストが大声で、「気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている」と言った。

(1) 「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ」（新共同）

①パウロは、ルカが記録している以上のことを語ったのであろう。

②フェストは我慢できなくなり、軽蔑の感情を表わした。

(2) フェストは、パウロが博学であることを認めた。

①博学とは、ヘブル語聖書に関する知識のことである。

②しかしフェストは、パウロが話している内容を理解することができなかった。

③フェストの世界観の中には、死者の復活は存在しない。

④このようなことに命を懸けるのは、頭がおかしくなっている証拠である。

⑤今も、福音に対して多くの人が同様の反応を示す。

(3) 当時のローマ人の死生観

①肉体の復活は信じていない。

②靈魂の不滅だけを信じる。

③使 17：32（アテネでの伝道）

Act 17:32 死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者たちは、「このことについては、またいつか聞くことにしよう」と言った。

④使 25：19（フェストの言葉）

Act 25:19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関することであり、また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです。

2. 25～26 節

Act 26:25 するとパウロは次のように言った。「フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のことばを話しています。

Act 26:26 王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対して私は率直に申し上げているのです。これらのことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも王の目に留まらなかったものはないと信じます。

(1) パウロは、礼儀正しい言葉で応答する。

- ①「私は、真実で理にかなったことばを話しています」（新改訳 2017）
- ②情熱＋礼儀＝クリスチャンの性質

(2) アグリッパ王は、福音の内容をよく知っていた。

- ①「これらのことは片隅で起こった出来事ではありません」
- ②イエスの公生涯、十字架、復活、教会の誕生、宣教の広がり、など。
- ③これらのことは、イスラエルの地ではよく知られていた。
- ④教会が誕生してから、30 年が経過していた。

V. アグリッパの応答（27～32 節）

1. 27 節

Act 26:27 アグリッパ王。あなたは預言者を信じておられますか。もちろん信じておられると思います。」

(1) この段階で、パウロとアグリッパの力関係が逆転した。

- ①アグリッパは、預言者を信じているはずである。
*彼は、神殿の管理者であり、大祭司の任命権者である。
- ②もしそうなら、イエスはメシアだと認めるはずである。
- ③パウロがアグリッパを聴聞しているのである。

(2) アグリッパのジレンマ

- ①パウロに賛同すると、フェストや他のローマ人の前で面目をつぶすことになる。
- ②しかし、預言者を信じないと言うと、ユダヤ人の反発を買う。

2. 28～29 節

Act 26:28 するとアグリッパはパウロに、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」と言った。

Act 26:29 パウロはこう答えた。「ことばが少なかりょうと、多かりょうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになったださる事です。」

(1) 訳文の比較

「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている」（新改訳）

「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」

（新改訳 2017）

「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか」（新共同訳）

「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」（口語訳）

①アグリッパは、皮肉を用いて回答を拒否した。

(2) パウロは、自分の願いを述べた。

①この話を聞いている人がみな私のようになったださる事である。

②「この鎖は別として」は、パウロの皮肉である。

3. 30～31

Act 26:30 ここで王と総督とベルニケ、および同席の人々が立ち上がった。

Act 26:31 彼らは退場してから、互いに話し合って言った。「あの人は、死や投獄に相当することは何もしていない。」

(1) 王と総督とベルニケは、立ち上がった。

①聴聞が終わったというしるしである。

②同席の人々は、アグリッパ王に敬意を表するという意味で立ち上がった。

③彼らは退場してから、パウロが無罪であることを認めた。

4. 32 節

Act 26:32 またアグリッパはフェストに、「この人は、もしカイザルに上訴しなかったら、釈放されたであろうに」と言った。

(1) パウロは、4回無罪であることが認められた。

①パリサイ人たち（使 23：9）

②千人隊長クラウデオ・ルシア（使 23：29）

③ユダヤ総督フェスト（使 25：25）

④アグリッパ王

(2) ルカは、パウロの裁判や弁明に多くのスペースを割いた。

①無罪を勝ち取るためである。

②最終的には、パウロは解放される。

＊牧会書簡は、解放後に執筆された書簡である。

結論

1. 天からの啓示の内容

(1) 使 26 : 18

Act 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中において御国を受け継がせるためである。』

(2) 福音の力

- ①霊的に盲目な人たちの目を開く。
- ②サタンに支配されている人たちを解放する。
- ③イエスを信じる信仰によって、罪の赦しを得させる。
- ④聖徒たちとともに相続に与らせる。

2. 啓示への応答

(1) 使 26 : 19～20

Act 26:19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、

Act 26:20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。

(2) パウロは、2つのことを宣べ伝えた。

①悔い改め

- ＊基本的には、心を変えること、認識を変えることである。
- ＊光に背を向けていた者が、180度方向転換し、光に顔を向けることである。
- ＊神なき生活から、神に立ち返ることである。
 - ・イエス・キリストを通して神に立ち返る。
- ＊2種類の悔い改めがある。
 - ・異邦人的悔い改め（罪の生活からの悔い改め）
 - ・ユダヤ人的悔い改め（見せかけの宗教生活からの悔い改め）

②悔い改めにふさわしい行い

- ＊信仰表現としての行いが、悔い改めに続く。
- ＊救いは信仰によって与えられるが、救いの確信は行いによって与えられる。

「カイザリヤからクレテへ」

使徒 27 : 1～8

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロは、カイザリヤからローマに向かう（27 : 1～28 : 15）

②ルカは、この船旅を詳細に記録している。

＊パウロを守る神の御手（彼がローマに行くことは神の御心である）

＊福音の異邦人世界への広がり

＊主の主権による教会建設

③パウロは、ローマに上というゴールを常に意識していた。

④使 19 : 21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

＊危険が待っているという警告が何度も発せられたが、意志を曲げなかった。

＊マケドニア、アカヤ、エルサレム、そしてローマという旅程を実現する。

＊実際に数々の危機が襲ってきたが、パウロの決心は揺るぎなかった。

＊数ヶ月の予想が、2年以上にも及んだ。

⑤ここには、神の主権による支配とそれに信頼する人間の責務の調和が見られる。

⑥この後悔では、囚人であるパウロがリーダーとして奉仕するようになる。

＊嵐の場面でも、パウロのリーダーシップが発揮される。

⑦今回は、カイザリヤからクレテ（クレタ）までの旅程を取り上げる。

(2) アウトライン

①出帆（1～2 節）

②シドンからミラ（3～5 節）

③クレテの島陰から良い港（6～8 節）

結論：

(1) ルカの記録の信頼性

(2) ヨナとパウロの対比

(3) イエスとパウロの対比

カイザリヤからクレテまでの旅程について学ぶ。

I. 出帆（1～2節）

1. 1節

Act 27:1 さて、私たちが船でイタリヤへ行くことが決まったとき、パウロと、ほかの数人の囚人は、ユリアスという親衛隊の百人隊長に引き渡された。

(1) 「私たち」

①船は、カイザリヤの港から出帆する。

②ルカが同行している。

*パウロがピリピを去ってから（20：5）、パウロと行動をともにしている。

*ルカは、カイザリヤでの2年間も、パウロに仕えたと思われる。

③4回目の「私たち章句」であるが、これが最も長い（27：1～28：16）。

*「私たち章句」は、ルカの記録に信憑性を与えている。

(2) 「パウロと、ほかの数人の囚人」

①パウロは、カイザルに上訴したローマ市民である。

②他の囚人よりも、丁寧な扱いを受けたはずである。

*囚人の名前と人数は分らない。

*裁判にかかるか、剣闘士との戦いで見世物となる異邦人の囚人であろう。

(3) 「ユリアスという親衛隊の百人隊長」

①「皇帝直属部隊の百人隊長ユリウスという者」（新共同訳）

*名誉ある部隊の百人隊長である。

②ユリウスもまた高貴な人格を持つ百人隊長であった。

*パウロに慈悲の心を示すようになる。

*ここに、神の摂理の御手が見える。

③カイザリヤの百人隊長コルネリオは、最初の異邦人信者となった。

2. 2節

Act 27:2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行くアドラミテオの船に乗り込んで出帆した。テサロニケのマケドニヤ人アリストアルコも同行した。

(1) 「アドラミテオの船」

①この船は、アドラミテオ港をベースとする船である。

②アドラミテオ港は、小アジアのトロアスから東南東に位置する港である。

③この船は、沿岸に沿って航行する小型船である。

④冬の嵐の季節が来る前に、母港に戻ろうとしている船である。

⑤百人隊長は、この船に乗り、途中でローマ行きの船に乗り換えようとしている。

(2)「テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した」

①アリストアルコも、ルカと同じようにカイザリヤでの2年間パウロに仕えた。

②同行者たちの存在は、大きな意味を持っていた。

＊パウロへの励まし

＊パウロという人物の信頼性の証明

II. シドンからミラ (3～5 節)

1. 3 節

Act 27:3 翌日、シドンに入港した。ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。

(1)「翌日、シドンに入港した」

①カイザリヤから約110キロ北にシドンがある。

②フェニキアの港町である。

(2)「ユリアスはパウロを親切に取り扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した」

①ユリアスはパウロに親切心を示した。

②友人たちのところに行き、もてなしを受けることを許可した。

＊パウロは、兵士たちと鎖でつながれて移動した。

③友人たちとは、シドンにあった教会の信者たちである。

＊そこでパウロは、信者たちとの交わりを楽しんだ。

＊さらに彼は、みことばを教えたことであろう。

2. 4～5 節

Act 27:4 そこから出帆したが、向かい風なので、キプロスの島陰を航行した。

Act 27:5 そしてギリキヤとパンフリヤの沖を航行して、ルキヤのミラに入港した。

(1)「向かい風なので、キプロスの島陰を航行した」

①地中海の風

＊春と秋には、西から東に吹いた。

＊あるいは、北西から吹くことも多かった。

＊西に向かう航路は、逆風の中を進む航路である。

②パウロが乗った船は、西ではなく北に進み、キプロス島の東側を航行した。

③さらに北に進んでギリキヤに至った。

④そこから西に進路を取り、パンフリヤの沖を航行した。

⑤そして、ルキヤのミラに入港した。

＊ミラは、アジア州最南端の港である。

⑥ここまでで、800キロの船旅。この距離を約14日間で移動したと思われる。

Ⅲ. クレテの島陰から良い港（6～8節）

1. 6節

Act 27:6 そこに、イタリアへ行くアレキサンドリヤの船があったので、百人隊長は私たちをそれに乗り込ませた。

(1) 百人隊長は、ミラ港でイタリア行きの船を見つけた。

①これは、アレキサンドリアを母港とする大型船である。

＊アレキサンドリアは、エジプトの首都である。

②この船は、穀物（麦）を運ぶ大型船である（38節）。

＊当時の大型船：長さ54メートル、幅15メートル、高さ13メートル

＊エジプトは、ローマ世界に穀物を供給する最大の輸出国であった。

＊当時は、エジプトの大型船が、イスラエル、シリア、小アジアの沿岸を頻繁に航行していた。

③この船には、少なくとも276人が乗船していた（37節）。

＊当時は、客船というものはなかった。

＊運搬船に旅人が乗った。

(2) ここで百人隊長は、パウロと他の囚人たちをこの船に乗り込ませた。

①これで、イタリアに向かう目途が立った。

2. 7～8節

Act 27:7 幾日かの間、船の進みはおそく、ようやくのことでクニドの沖に着いたが、風のためにそれ以上進むことができず、サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、

Act 27:8 その岸に沿って進みながら、ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた。その近くにラサヤの町があった。

(1) 「クニドの沖に着いた」

①船は、北西の風に進路を阻まれた。

＊数日の間、船の進みは遅かった。

②クニドは、アジア州の南西の端に位置する。

③エペソから約170キロ南にある。

- ④地中海とエーゲ海の境に当たる海域である。
- (2) 「サルモネ沖のクレテの島陰を航行し、」
 - ①北西の風が吹いたので、船は南西にあるクレテ島の東側と南側を航行した。
- (3) 「ようやく、良い港と呼ばれる所に着いた」
 - ①恐らく、現代のリメオナス・カルースであろう。
 - ②その近くに、ラサヤの町があった。

結論

1. ルカの記録の信頼性

- (1) Sir William Mitchell Ramsay (1851-1939)
- (2) スコットランド出身の聖書学者、考古学者
- (3) 19世紀末、スコットランドの未信者グループが、聖書の間違いを見つけるためのプロジェクトを開始した。
 - ①ウィリアム・ラムゼイが、ルカの記録の調査官として任命された。
 - ②彼は、使徒の働きの記録が不正確であることを証明するために、パウロの訪問地を訪れ、現地調査を行った。
- (4) ラムゼイは、この調査の後にクリスチャンになった。
 - ①彼は、小アジア研究の第一人者となった。
 - ②彼は、使徒の働きに関する書を何冊か記した。
 - * 「St. Paul, the Traveler and the Roman Citizen」が有名である。

2. ヨナとパウロの対比

- (1) ヨナ書の内容
 - ①ヨナは、奇跡的な方法で嵐の海から生還することができた。
 - ②その結果、彼は異邦人の大都市（ニネベ）で宣教することができた。
 - ③多くの異邦人が救われた。
- (2) パウロの旅
 - ①パウロは、奇跡的な方法で難破を乗り越えることができた。
 - ②その結果、彼はローマに到着し、そこで宣教することができた。
 - ③多くの異邦人が福音を聞いた。
 - ④使 28 : 30～31

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

3. イエスとパウロの対比

(1) ルカの福音書の中での強調点

- ①イエスのエルサレムに向けての旅
- ②エルサレムでの最後の1週間
- ③この手法によって、イエスの死と復活のインパクトが強調される。

(2) パウロの旅の中での強調点

- ①ルカの福音書と使徒の働きの内容は継続している。
- ②パウロは、幾多の苦難と嵐の海を乗り越えてローマに着く。
- ③福音がローマ帝国の首都で、異邦人に向けて宣言される。

(3) 2つの真理

- ①神の約束は、必ず成就する。
- ②人間の側の努力と忍耐が必要である。

「大嵐との遭遇」

使徒 27：9～26

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロは、カイザリヤからローマに向かう（27：1～28：15）

②パウロは、ローマに上るというゴールを常に意識していた。

③使 19：21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

④カイザリヤでの拘留は2年にも及んだが、彼の確信が揺らぐことはなかった。

⑤ここには、神の主権による支配とそれに信頼する人間の責務の調和が見られる。

⑥前回は、カイザリヤからクレテ（クレタ）までの旅程を取り上げた。

＊船は、クレテの島陰を航行し、「良い港」に着いた。

⑦今回は、大嵐との遭遇を取り上げる。

(2) アウトライン

①パウロの助言（9～12 節）

②船の漂流（13～17 節）

③絶望する乗員たち（18～20 節）

④パウロの励まし（21～26 節）

結論：

(1) 人生の羅針盤

(2) 羅針盤を持った人の特権

(3) 羅針盤を持った人の使命

大嵐との遭遇について学ぶ。

I. パウロの助言（9～12 節）

1. 9～10 節

Act 27:9 かなりの日数が経過しており、断食の季節もすでに過ぎていたため、もう航海は危険であったので、パウロは人々に注意して、

Act 27:10 「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、

危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」と言った。

(1) 「良い港」に着いた船は、重大な決断を迫られた。

①このまま航海を続けるべきかどうかの判断を迫られた。

②船は、天候が回復するのを「**かなりの日数**」待った。

③この間、パウロがクレテで伝道したかどうかは、分からない。

④テト 1 : 5

Tit 1:5 私があなただをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。

*パウロは、ローマでの投獄から解放されて後、クレテで伝道している。

(2) パウロは、出帆に反対した。

①当時の地中海航行の常識は、次のようなものであった。

*9 月 14 日～11 月 11 日までは航行が危険な時期である。

*11 月 11 日から 5 ヶ月間は冬の時期で、航行は完全にストップされた。

②「**断食の季節**」を過ぎており、海が危険な状態になっていたからである。

③「**断食の季節**」とは「贖罪の日」のことで、9 月末から 10 月初めにやって来る。

*1 日だけの祭りで、巡礼祭ではない（レビ 16 : 29～34 参照）。

*大祭司が至聖所に入り、罪の贖いのためのいけにえの血を捧げる日である。

*告白していない罪、まだ赦されていない罪を、神に赦していただく日。

*イエスは、大祭司として、またいけにえとして、罪の贖いを完成された。

*この日、ユダヤ人たちは、居住地において断食を行った。

(3) そこでパウロは、こう進言した。

「皆さん。この航海では、きっと、積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大きな損失が及ぶと、私は考えます」

①これは神からの啓示ではなく、パウロの体験に基づく意見である。

②彼は、数度に及ぶ伝道旅行で、航海に関してはかなりの経験を積んでいた。

*11～12 回も船旅を経験し、少なくとも 4,800 キロを船で移動した。

③2 コリ 11 : 25

2Co 11:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。

④4 回目の難船を避けたいと願うのは、当然である。

2. 11～12 節

Act 27:11 しかし百人隊長は、パウロのことばよりも、航海士や船長のほうを信用した。

Act 27:12 また、この港が冬を過ごすのに適していなかったので、大多数の者の意見は、ここを出帆して、できれば何とかして、南西と北西とに面しているクレテの港ピニクスまで行って、そこで冬を過ごしたいということになった。

(1) しかし、百人隊長はその警告を無視した。

①海に関しては、パウロは素人である。

②百人隊長は、専門家の航海士や船長の判断を採用したのである。

③この種の穀物輸送船は、ローマ帝国の管理下に置かれていた。

＊ローマ帝国のための仕事をしているとみなされた。

＊所有者と船長は、ローマの官憲の指示に従う。

(2) 大多数の者の意見も、百人隊長と同じであった。

①今停泊中の「良い港」は、冬を越すのに適していない。

②80km 西にあるクレテの港ピニクスまで行き、そこで冬を過ごしたい。

③専門家の判断が間違いで、パウロの判断が正しかったことは、後で分かる。

II. 船の漂流 (13～17 節)

1. 13 節

Act 27:13 おりから、穏やかな南風が吹いて来ると、人々はこの時とばかり錨を上げて、クレテの海岸に沿って航行した。

(1) 大多数の意見の正しさを証明するかのようになり、穏やかな南風が吹いて来た。

①これまでは、北西の風に悩まされていた。

②人々は、天が味方してくれたと感じ、急いで錨を上げた。

③クレテ島の海岸に沿って航行すれば、1日でピニクス港に着くはずであった。

2. 14～15 節

Act 27:14 ところが、まもなくユーラクロンという暴風が陸から吹きおろして来て、

Act 27:15 船はそれに巻き込まれ、風に逆らって進むことができないので、しかたなく吹き流されるままにした。

(1) ところが、突然「ユーラクロン」（北東から吹く嵐）が陸から吹きおろして来た。

①船は、風に逆らって進むことができない。

②吹き流されるままにしておくしか、方法はない。

③船は、クレテ島の沿岸から、大海に放り出された。

3. 16～17 節

Act 27:16 しかしクラウドという小さな島の陰に入ったので、ようやくのことで小舟を処置することができた。

Act 27:17 小舟を船に引き上げ、備え綱で船体を巻いた。また、スルテスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具をはずして流れるに任せた。

(1) クラウドという小さな島の陰に入った。

①風が少し収まったので、対策を講じた。

②船の後ろに繋いであった小舟を、ようやくのことで引き上げることができた。

＊これは、救命ボートである。すでに海水が満ちていたであろう。

＊そのままでは、本船に衝突する危険性があった。

＊この小舟は、先に行ってから、上陸のために必要になるかもしれない。

③本船がバラバラにならないように、船底に綱を回し、船全体をその綱で巻いた。

＊浸水を防ぐための応急処置である。

④また、船具を外して、船が流れるままにした。

＊「船具」とあるのは、「帆」のことであろう。

＊浅瀬に乗り上げるのを恐れて、「帆」を外したのである。

＊「スルテスの浅瀬」とは、北アフリカ（リビヤ）沿岸の浅瀬である。

Ⅲ. 絶望する乗員たち（18～20 節）

1. 18～19 節

Act 27:18 私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、

Act 27:19 三日目には、自分の手で船具までも投げ捨てた。

(1) 翌日、さらに状況は悪化した。

①人々は、積荷を捨て始めた。

②これは、船を軽くするための方法である。

③ヨナ 1:5

Jon 1:5 水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。

(2) 3 日目には、自分の手で、「船具」までも投げ捨てた。

①「船具」とは、帆、ロープ、錨などのことであろう。

＊ただし、最低限必要なものは、残しておいたはずである。

2. 20 節

Act 27:20 太陽も星も見えない日が幾日も続き、激しい暴風が吹きまくるので、私たちが助

かる最後の望みも今や絶たれようとしていた。

(1) ルカは、「太陽も星も見えない日が幾日も続き、…」と記している。

①漂流は丸2週間続くことになる。

②当時は、羅針盤がまだ発明されていなかった。

＊羅針盤（コンパス）は、磁石が南北を示すことを利用して方位を測る道具。

③陸地の風景や、天体の運行によって、船の位置を確認していた。

④太陽も星も見えないとは、完全に方向感覚をなくしたということである。

(2) 「私たちが助かる最後の望みも今や絶たれようとしていた」という状況であった。

①276人の乗員の中で、希望を抱いていたのはパウロだけであった。

＊ローマに行くという神の約束があった。

②同行していたルカでさえも、絶望的になった。

IV. パウロの励まし（21～26節）

1. 21～22節

Act 27:21 だれも長いこと食事をとらなかったが、そのときパウロが彼らの中に立って、こう言った。「皆さん。あなたがたは私の忠告を聞き入れて、クレテを出帆しなかったら、こんな危害や損失をこうむらなくて済んだのです。」

Act 27:22 しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。

(1) 嵐の中で、だれも長いこと食事をとっていなかった。

①船酔いと失望による食欲減退。

②乗員たちは、これ以上嵐が続けば、一行が助かる見込みはないと考えていた。

③最悪の状況になった時、パウロは立ち上がって励ましの言葉を語った。

(2) クレテを出帆する時に、私の忠告に耳を傾けていれば、こうはならなかった。

①つまり、彼らは重要な助言を無視したということである。

＊それゆえ、次に与えられる忠告には耳を傾けなければならない。

＊パウロは、過去の失敗よりも、将来の希望に目を向けさせた。

(3) しかし、いのちを失う者はひとりもないので、元気を出せ。

①失われるのは船だけである。

②「いのちを失う者はひとりもない」が、これ以降の物語の展開の鍵となる。

③個人的な予測では、「積荷や船体だけではなく、私たちの生命にも、危害と大き

な損失が及ぶと、私は考えます」となっていた（10節）。

④神からの啓示が与えられたので、それを修正して、「いのちを失う者はひとりもない」と断言した。

2. 23～24 節

Act 27:23 昨夜、私の主で、私の仕えている神の御使いが、私の前に立って、

Act 27:24 こう言いました。『恐れてはいけません。パウロ。あなたは必ずカイザルの前に立ちます。そして、神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです。』

(1) 前の夜、彼は、天使からの御告げを受けた。

①「私の仕えている神の御使い」

②これは、異教の神とパウロが仕えている神を区別するための言葉である。

③御使いはパウロに、必ずカイザルの前に立つようになると告げた。

④つまり、パウロはそれまでは死なないということである。

(2) 「神はあなたと同船している人々をみな、あなたにお与えになったのです」

①同船している人々も、パウロのゆえに助かる。

②パウロはローマに着くという神の計画の上に、全員が乗せられたのである。

3. 25～26 節

Act 27:25 ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりにすると、私は神によって信じています。

Act 27:26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。」

(1) パウロは、すべて啓示された通りになるから、元気を出しなさいと励ました。

①このことをされるのは、パウロが信じている神であることを印象づけた。

(2) 最後に彼は、船は必ず、どこかの島に打ち上げられると予告した。

①結果的には、その島はマルタ島だった。

②この時点では、そこまでは知らされていなかった。

③神の導きは、必要なときに、必要なだけ、与えられる。

結論

1. 人生の羅針盤

(1) 安全な航海のためには羅針盤が必要である。

①おそくとも、11世紀末には中国の船に装備されていた。

- ②それがヨーロッパに伝わって改良され、大航海時代の幕を開く計器となった。
- (2) パウロが乗った船には、羅針盤はなかった。
 - ①昼は、陸地の景色が羅針盤となった。
 - ②夜は、月や星が羅針盤となった。
 - ③嵐の中では、すべての羅針盤が奪われた状態になる。
- (3) パウロには、羅針盤があった。
 - ①ローマに行くという神の約束が、彼の羅針盤であった。
 - ②神の御使いは、幻の中で、その羅針盤が正しいことを保証した。
- (4) 人生における羅針盤は、神のことばである。

2. 羅針盤を持った人の特権

- (1) 羅針盤を与えられたパウロは、その船の中で際立った存在になった。
 - ①彼には、揺れ動くということがなかった。
 - ②彼ひとりだけが、絶望しなかった。
- (2) 彼の立場は、囚人からリーダーに移行した。
 - ①最初は、彼の意見は無視されたが、最後は、皆が耳を傾けるようになった。
 - ②羅針盤を持った人の最大の特権は、人々に仕えることである。

3. 羅針盤を持った人の使命

- (1) 羅針盤を持った人の使命は、絶望した人々に希望を語ることである。
 - ①パウロは 2 度、「元気を出しなさい」と語っている。
 - ②使 27 : 36

Act 27:36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。

- (2) この希望は、神を信じるところから来る希望である。
 - ①パウロは、彼が信じる神から啓示が与えられたことを強調した。
 - ②マルタ島に上陸する直前に、ともに食事をした。
 - ③使 27 : 35～37

Act 27:35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。

Act 27:36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。

Act 27:37 船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。

「船の座礁」

使徒 27：27～44

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロは、カイザリヤからローマに向かう（27：1～28：15）。

②パウロは、ローマに上るというゴールを常に意識していた。

③使 19：21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

④前回は、大嵐との遭遇を取り上げた。

＊船が漂流し、乗員たちは絶望した。

＊パウロは、彼らを励まし、神のことばを伝えた。

＊使 27：22

Act 27:22 しかし、今、お勧めします。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う者はひとりもありません。失われるのは船だけです。

⑤今回は、船の座礁を取り上げる。

＊神の国と悪魔の国（月刊紙に連載中）

＊この箇所でも、小さなスケールでの葛藤が起こっている。

(2) アウトライン

①逃亡しようとする水夫たち（27～32 節）

②一同を励ますパウロ（33～38 節）

③座礁する船（39～44 節）

結論：

(1) 神の約束と悪魔の妨害

(2) 神の約束が成就する方法

船の座礁の記事から教訓を学ぶ。

I. 逃亡しようとする水夫たち（27～32 節）

1. 27～28 節

Act 27:27 十四日目の夜になって、私たちがアドリヤ海を漂っていると、真夜中ごろ、水夫たちは、どこかの陸地に近づいたように感じた。

Act 27:28 水の深さを測ってみると、四十メートルほどであることがわかった。少し進んでまた測ると、三十メートルほどであった。

(1) 14日目の夜になって

①船は嵐の中を14日間漂流した。「良い港」を出てからの日数である。

＊船は、約750キロ流された。

②水夫たちは、陸地に近づいていると感じた。

＊水夫は、陸地の臭いをかぎ分けることができていると言われている。

＊あるいは、岸に打ち付ける波の音を聞いた可能性もある。

(2) アドリア海を漂っていると

①当時、アドリア海とは、地中海の中央部のことである。

＊イタリア、クレテ島、北アフリカに囲まれた海域

②パウロの船は、地中海の南側から北西に流された。

(3) 水深を2度測った。

①糸（ロープ）に錘を付け、どこまで沈むかで水深を測る。

②1 オルギヤ（竿）＝6 フィート（180 cm）

③20 オルギヤ＝180 cm×20＝36 メートル

④15 オルギヤ＝180 cm×15＝27 メートル

⑤水深が浅くなって行くので、陸地に近づいているのが分かる。

2. 29～30 節

Act 27:29 どこかで暗礁に乗り上げはしないかと心配して、ともから四つの錨を投げおろし、夜の明けるのを待った。

Act 27:30 ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとして、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていたので、

(1) 船が暗礁に乗り上げるのを恐れ、4つの錨を投げ下ろした。

①船が流されないように固定するためである。

②ともから錨を降ろした理由は、へさきを陸地に向けるためである。

(2) 夜の明けるのを待った。

①「夜が明けるのを待ちわびた」（新改訳2017）

②ギリシア語で「ユーコマイ」は、「祈った」という訳も可能である。

(3) ところが、水夫たちは船から逃げ出そうとした。

- ①水夫たちは、小舟に乗って自分たちだけが助かろうとした。
- ②彼らは、へさきから錨を降ろすように見せかけて、小舟を海に降ろしていた。
- ③パウロは、鋭い観察眼で、水夫たちの陰謀を見抜いた。

3. 31～32 節

Act 27:31 パウロは百人隊長や兵士たちに、「あの人たちが船にとどまっていなければ、あなたがたも助かりません」と言った。

Act 27:32 そこで兵士たちは、小舟の綱を断ち切って、そのまま流れ去るのに任せた。

- (1) パウロは、百人隊長や兵士たちに警告を発した。
 - ①水夫たちは、船を操る専門家である。
 - ②乗員たちの命を守るためには、彼らの力が必要である。
 - ③彼らがいなくなると、船は非常に危険な状態に陥る。
 - ④今回は、百人隊長はパウロの助言を聞き入れた。
- (2) 兵士たちは、小舟が水夫たちに利用されないように、綱を断ち切った。
 - ①これは百人隊長の命令による行為である。
 - ②小舟は、そのまま流されて行った。
 - ③後に上陸する際に役立ったはずの小舟が、このとき、なくなってしまった。
 - ④乗員たちは、岸まで泳いで行くことになる。

Ⅱ. 一同を励ますパウロ（33～38 節）

1. 33～34 節

Act 27:33 ついに夜の明けかけたころ、パウロは、一同に食事をとることを勧めて、こう言った。「あなたがたは待ちに待って、きょうまで何も食べずに過ごして、十四日になります。

Act 27:34 ですから、私はあなたがたに、食事をとることを勧めます。これであなたがたは助かることになるのです。あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません。」

- (1) 常識を働かせるパウロ
 - ①パウロは、食事をとることを勧めた。
 - ②乗員たちは、嵐の中を漂流したため、14 日間も食事をとっていなかった。
 - ③上陸するためには、体力が必要である。
- (2) 神の約束を伝えるパウロ
 - ①「これであなたがたは助かることになるのです」
 - ②「あなたがたの頭から髪一筋も失われることはありません」

- *これは、旧約聖書によく出て来る格言である。
- *その意味は、ユダヤ人でなくても理解できた。
- *「あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています」（ルカ 12：7）

2. 35～36 節

Act 27:35 こう言って、彼はパンを取り、一同の前で神に感謝をささげてから、それを裂いて食べ始めた。

Act 27:36 そこで一同も元気づけられ、みなが食事をとった。

(1) これは聖餐式ではない。

①ユダヤ的祈りから始める食事である。

②食前の祈り (b' rakhah)

「Barukh attah, Adonai Eloheynu, Melekh-ha'olam, haMotzi lechem min ha'aretz」
(Praised be you, Adonai our God, King of the universe, who brings forth bread from the earth).

「あなたを称えます、私たちの神【主】、宇宙の王、地からパンを取り出す方」

③この救出は、パウロの神によるものであることが、印象付けられた。

(2) パウロは、パンの一片を裂き、それを食べた。

①一同はパウロの例に倣い、食事をとった。

②この食事は、彼らに力を与えた。

3. 37～38 節

Act 27:37 船にいた私たちは全部で二百七十六人であった。

Act 27:38 十分食べてから、彼らは麦を海に投げ捨てて、船を軽くした。

(1) 乗員は、276 人いた。

①その中に囚人が何人いたのかは、分からない。

(2) 十分に食べてから、彼らは船荷（麦）を海に投げ捨てた。

①船を軽くするためである。

②吃水（船が沈む深さ）を浅くするための方法である。

③これは、船を可能な限り陸に近づけるための対策である。

Ⅲ. 座礁する船 (39～44 節)

1. 39～40 節

Act 27:39 夜が明けると、どこの陸地かわからないが、砂浜のある入江が目に残ったので、できれば、そこに船を乗り入れようということになった。

Act 27:40 錨を切って海に捨て、同時にかじ綱を解き、風に前の帆を上げて、砂浜に向かって進んでいった。

(1) 砂浜のある入江

- ①伝統的に聖パウロ湾と呼ばれている。
- ②港ほどではないが、船を着けるのに適した場所である。
- ③その砂浜に船を乗上げることにした。

(2) 船は前進し始めた。

- ①船の両側に付いている櫂を出し、それで漕ぎ始めた。
- ②前の帆は、船に推進力を与えた。

2. 41～42 節

Act 27:41 ところが、潮流の流れ合う浅瀬に乗り上げて、船を座礁させてしまった。へさはめり込んで動かなくなり、ともに激しい波に打たれて破れ始めた。

Act 27:42 兵士たちは、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと相談した。

(1) 2つの潮流が混じり合う所では、砂や泥が堆積していた。

- ①そこに浅瀬があることは見えなかった。
- ②砂浜に乗り上げる前に、船はその浅瀬に乗り上げ、座礁した。
- ③へさが砂の中にめり込んだ。
- ④船は動かなくなり、後部が激しい波に打たれ壊れ始めた。

(2) 兵士たちは、囚人たちを殺そうとした。

- ①彼らが逃げたなら、自分たちが死刑宣言を受けることになる。
- ②囚人たちを殺すのは、自己保身のためである。
- ③囚人たちが殺されたら、パウロが語った神の約束は成就しなかったことになる。

3. 43～44 節

Act 27:43 しかし百人隊長は、パウロをあくまでも助けようと思って、その計画を押さえ、泳げる者がまず海に飛び込んで陸に上がるように、

Act 27:44 それから残りの者は、板切れや、その他の、船にある物につかまって行くように命じた。こうして、彼らはみな、無事に陸に上がった。

(1) 百人隊長は、パウロを助けようとした。

- ①彼は、パウロが信頼できる人物であることを認めた。
- (2) 百人隊長は、3つのことを命じた。
 - ①兵士たちの計画を認めなかった。
 - ②泳げる者は、先に泳いで陸に上がるように命じた。
 - ③泳げない者は、浮ぶ物につかまって陸まで行くように命じた。
- (3) パウロの預言が成就した。
 - ①船は壊れた。
 - ②しかし、全員が無事に上陸した。

結論

1. 神の約束と悪魔の妨害

- (1) 小舟で逃げようとする水夫たち
 - ①水夫たちの計画をパウロが見抜いた。
 - ②百人隊長は、パウロの勧告に従った。
 - ③兵士たちは、小舟を切り離した。
- (2) 潮流の流れ合う浅瀬
 - ①砂浜に乗り入れようとしたが、浅瀬がそれを妨害した。
 - ②パウロは、食事を勧めていた。
 - ③百人隊長の冷静な判断があった。
 - *泳げる者を先に行かせた。
 - *泳げない者には、浮遊物につかまるように命じた。
- (3) 囚人を殺そうとする兵士たち
 - ①百人隊長の冷静な判断があった。
 - *兵士たちを静めた。
 - *パウロを救おうとした。

2. 神の約束が成就する方法

- (1) 人間の努力と超自然の要素が調和している。
 - ①水夫の存在が必要である。
 - ②食事が必要である。
 - ③泳ぎの能力や浮遊物が必要である。
- (2) パウロに起こったことを普遍化してはならない。
 - ①神は、不信者を用いて働かれることもある。

「マルタ島上陸」

使徒 28：1～10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロは、カイザリヤからローマに向かう（27：1～28：15）。

②パウロは、ローマに上るというゴールを常に意識していた。

③使 19：21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

④パウロは、幾多の困難に直面してきた。

＊大嵐に遭遇し、船が漂流した。

＊船が座礁した。

⑤しかし、パウロの命は守られて来た。

⑥今回は、マルタ島上陸とそこでの奉仕を取り上げる。

(2) アウトライン

①島民のもてなし（1～2 節）

②まむし（3～6 節）

③病人の癒し（7～10 節）

結論：

(1) まむしの毒からの守り

(2) マルタ島での癒し

(3) カペナウムでの癒し

マルタ島での奉仕から教訓を学ぶ。

I. 島民のもてなしを受けるパウロ（1～2 節）

1. 1 節

Act 28:1 こうして救われてから、私たちは、ここがマルタと呼ばれる島であることを知った。

(1) 一行は、マルタ島に上陸した。

①この島は、地中海の中央、シチリア島から南に 93 キロ離れた所にある。

②縦 29 キロ、横 13 キロ、最高標高点 253 メートルの島である。

- ③現在は、マルタ共和国内の島（同国内で最大の島）である。
- ④1989 年 12 月、米ソ首脳による会談（マルタ会談）が開催され、米ソ冷戦の終結が宣言された。
- ⑤猫が非常に多く生息している（70 万匹以上で、人口の倍近くの数）。
- ⑥マルチーズ犬の原産地でもある。

2. 2 節

Act 28:2 島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。

(1) 島の人々

- ①ギリシア語では「バーバロス」である。
- ②英語では、「the barbarians」である。
- ③野蛮人や未開人というニュアンスはない。
- ④ギリシア語やラテン語を話さない人は、「バーバロス」と呼ばれた。
- ⑤この時代、マルタ島には、フェニキア出身の人たちが住んでいた。
- ⑥彼らは、ギリシア・ローマ文明とは異なるが、洗練された文化を持っていた。

(2) 彼らは、漂着した一行を非常に親切にもてなしてくれた。

- ①雨が降って寒かったので、浜辺でたき火を焚いてくれた。

II. まむしに噛まれるパウロ（3～6 節）

1. 3 節

Act 28:3 パウロがひとかかえの柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしはい出して来て、彼の手に取りついた。

(1) パウロは、疲れていたであろうに、自分でも柴をたばねて、火にくべた。

- ①当時の彼は、50 代の半ばである。

(2) 一匹のまむしが、パウロの手に噛みついた。

- ①寒かったので、まむしは固くなっており、昏睡状態にあった。

*木の枝と間違いやすい状態であった。

- ②ところが、熱気に驚いて目を覚まし、出て来た。

- ③まむしは、パウロの手に噛みついた。

*通常まむしは、噛んだらすぐに離れる。

*昏睡状態が多少残っていたので、異常な行動を取ったのであろう。

④ちなみに、現在マルタ島にまむしは生息していない。

⑤パウロは、3度命の危険を経験した。

*大嵐

*座礁

*まむし

2. 4～5節

Act 28:4 島の人々は、この生き物がパウロの手から下がっているのを見て、「この人はきつと人殺した。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ」と互いに話し合った。

Act 28:5 しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。

(1) 島民の評価

①パウロは極悪人だ（人殺し）。

②海からは逃れたが、正義の女神は彼を生かしておかないのだ。

*正義の女神とは、偶像神ではなく、抽象的な概念を神格化したものである。

(2) しかし、パウロは平然としていた。

①まむしを火の中に振り落とした。

②なんの害も受けなかった。

3. 6節

Act 28:6 島の人々は、彼が今にも、はれ上がって来るか、または、倒れて急死するだろうと待っていた。しかし、いくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、「この人は神さまだ」と言いだした。

(1) 彼らは、パウロが苦しんで地に倒れるのを注視して待った。

①しかし、いくら待ってもパウロに異変は起こらなかった。

②島民たちは、パウロに対する評価を変えた。

③彼らは、パウロを神だと言い始めた。

(2) かつてパウロは、神だと言われたことがあった。

①使 14：11～12（ルステラでの足のきかない人の癒し）

Act 14:11 パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」と言った。

Act 14:12 そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。

(3) マルタの島民たちは、パウロを礼拝するところまでは行っていない。

①ルカがこれを書いたのは、パウロの上に神の守りがあることを示すためである。

②パウロは、必ずローマに行き、そこで主イエスを証しする。

Ⅲ. 病人を癒すパウロ（7～10節）

1. 7節

Act 28:7 さて、その場所の近くに、島の首長でポプリオという人の領地があった。彼はそこに私たちを招待して、三日間手厚くもてなしてくれた。

(1) 島の首長でポプリオという人

①ギリシア語で「プロトス」は、ローマの官職のタイトルである。

②マルタ島の総督である。

(2) パウロの一行は、ポプリオの家に招かれた。

①まむし事件で、ポプリオは感銘を受けたのであろう。

②パウロ、ルカ、アリストアルコスが招かれた。

③彼らは、3日間にわたって手厚いもてなしを受けた。

2. 8節

Act 28:8 たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に着いていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。

(1) パウロは、ポプリオの父を癒した。

①熱病と下痢で床に着いていた。

②これはマルタ熱と呼ばれる感染症である。

＊特に、地中海沿岸に分布する感染症である。

＊マルタ島のヤギの生乳の飲用により感染する。

＊有熱期と無熱期が数か月間にわたって反復する。

③パウロは、祈り、手を置いてから癒した。

3. 9～10節

Act 28:9 このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった。

Act 28:10 それで彼らは、私たちを非常に尊敬し、私たちが出帆するときには、私たちに必要な品々を用意してくれた。

(1) 癒しの噂が島中に広がった。

①ほかの病人たちも来て、パウロによって直してもらった。

(2) 島民たちは、パウロの一行を非常に尊敬した。

①3 ヶ月後に出帆するときには、必要な品々を用意してくれた。

結論

1. まむしの毒からの守り

(1) パウロは、意図的にまむしを掴んだのではない。

①彼は、神を試みたのではない。

②意図せずにまむしを掴んだが、神の守りがあったということである。

(2) これは、イエスの預言の成就である。

①マコ 16 : 18

Mar 16:18 蛇をもつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。」

②ルカ 10 : 19

Luk 10:19 確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。

2. マルタ島での癒し

(1) パウロは、自分の自由になる癒しの賜物を持っていたわけではない。

①パウロは、自分の病を癒すことができなかった（2 コリ）。

*2 コリ 12 : 7～8

2Co 12:7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

2Co 12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

②同労者の病を癒すこともできなかった。

*2 テモ 4 : 20

③しかし、神が癒そうとされた人なら、誰でも癒すことができた。

*パウロは神ではなく、神の使いであった。

3. カペナウムでの癒し

(1) ルカ 4 : 38～40

Luk 4:38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。すると、シモンのしゅうとめが、ひどい熱で苦しんでいた。人々は彼女のためにイエスをお願いした。

Luk 4:39 イエスはその枕もとに来て、熱をしっかりとつけられると、熱がひき、彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた。

Luk 4:40 日が暮れると、いろいろな病気で弱っている者をかかえた人たちがみな、その病人をみもとに連れて来た。イエスは、ひとりひとりに手を置いて、いやされた。

①イエスは、ひとりの癒しから始め、多くの人を癒された。

*パウロも、ひとりの癒しから始め、島のほかの病人たちを癒した。

②最初のひとは、イエスをもてなしている人の家族（姑）であった。

*パウロの場合の最初のひとは、パウロをもてなした総督の父であった。

③ペテロの姑は、高熱（風土病）で苦しんでいた。

*総督の父も、高熱（マルタ熱）で苦しんでいた。

④イエスは、ひとりひとりに手を置いて、癒した。

*パウロも、祈り、手を置いて、癒した（使徒の働きではここだけである）。

(2) ルカの福音書と使徒の働きをひとつの記録として見る。

①公生涯の最初の出来事と、使徒の働きの最後の出来事が、対比されている。

②A-B-B-Aという形式が見られる（キアズム）。

(3) ルカの視点

①彼は、ルカの福音書でイエスの生涯を描いた。

②彼は、使徒の働きで復活のイエスの活動を描いた。

③イエスは、今も教会建設の業を進めておられる。

④私たちは、その目的のために仕える神のしもべたちである。

「ローマ到着」

使徒 28 : 11～31

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パウロは、カイザリヤからローマに向かう（27 : 1～28 : 15）。

②パウロは、ローマに上るというゴールを常に意識していた。

③使 19 : 21

Act 19:21 これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

④パウロは、幾多の困難に直面してきた。

＊大嵐に遭遇し、船が漂流した。

＊船が座礁した。

＊まむしに噛まれた。

⑤しかし、パウロの命は守られて来た。

⑥そしてついに、ローマに到着する。

(2) アウトライン

①マルタからローマへ（11～16 節）

②ユダヤ人たちとの最初の会談（17～22 節）

③ユダヤ人たちとの 2 度目の会談（23～29 節）

④異邦人伝道（30～31 節）

結論：

(1) 使徒の働き of 執筆プラン（使 1 : 8）

(2) 使徒の働き of 結末（使 28 : 30～31）

(3) 神の国

(4) 今も続くキリストの御業

ローマでの奉仕の記事から教訓を学ぶ。

I. マルタからローマへ（11～16 節）

1. 11～13 節

Act 28:11 三か月後に、私たちは、この島で冬を過ごしていた、船首にデオスクロイの飾り

のある、アレキサンドリヤの船で出帆した。

Act 28:12 シラクサに寄港して、三日間とどまり、

Act 28:13 そこから回って、レギオンに着いた。一日たつと、南風が吹き始めたので、二日目にはポテオリに入港した。

(1) 三か月後

- ①マルタ島で3ヶ月間待った。
- ②春になると航海が可能になるが、3ヶ月後とは、2月中旬頃であろう。
- ③百人隊長は、マルタ島で冬を過ごしていた船を予約することができた。
- ④この船は、アレキサンドリアを母港とする穀物船である。
- ⑤マルタ島からローマまでは、まだ335キロもある。

(2) 船首にデオスクロイの飾りのある、アレキサンドリヤの船

- ①「デオスクロイ」は、航海の守護神である。
*カストルとポルックスという双子のギリシア神話の神を指す。
- ②ローマ時代の地中海には、「デオスクロイ」を船首に飾った船が多かった。
- ③「デオスクロイの飾りのある船」は、皮肉（アイロニー）である。
*ルカは、真の守護神は誰かを思い起こさせるために書いたのであろう。

(3) マルタ島を出帆してからの旅程

- ①シラクサ：シチリア島の東岸にある大いに栄えた港町
*ここに3日間留まった。
- ②レギオン：イタリア半島のつま先に位置する港町
- ③ポテオリ：さらに360キロ北。イタリア半島のすねの部分に位置する港町
*ほとんどの船が、ここで船荷を降ろす。

2. 14～15 節

Act 28:14 ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうして、私たちはローマに到着した。

Act 28:15 私たちのことを聞いた兄弟たちは、ローマからアピオ・ポロとトレス・タベルネまで出迎えに来てくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた。

(1) ポテオリには、教会があった。

- ①パウロは、兄弟たちのもてなしを受け、彼らのところに7日間滞在した。
- ②「こうして、私たちはローマに到着した」
*ポテオリからローマまでは、まだ200キロもある。
*ルカは、ローマに着いたという感慨を持ったのである。

(2) パウロ到着の知らせは、ローマまで伝わった。

①ローマの信者たちは、トレス・タベルネまで出迎えに来た。

＊アッピア街道を50キロ以上も下って来た。

②余力のある者たちは、さらに15キロ下って、アピオ・ポロまで来た。

(3) パウロは初めてローマのクリスチャンたちと会った。

①これより3年前に、パウロはローマ人への手紙を書き送っていた。

②ローマの信者たちからの歓迎を受け、パウロは神に感謝した。

③また、大いに勇気づけられた。

3. 16 節

Act 28:16 私たちがローマに入ると、パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許された。

(1) マルタ島からローマまでは、約3週間の旅であったと思われる。

①パウロのローマ到着は、イエスの勝利の入城に似ている。

②福音は、ユダヤ、サマリア、地の果て（ローマ）までも届けられた。

③異邦人のための使徒パウロは、ローマ帝国の首都で福音を伝えるようになった。

(2) ローマ市民であるパウロは、丁寧な扱いを受けた。

①自費で借りた家にひとりで住むことが許された。

②番兵が付けられた。

II. ユダヤ人たちとの最初の会談（17～22 節）

1. 17～18 節

Act 28:17 三日の後、パウロはユダヤ人のおもだった人たちを呼び集め、彼らが集まったときに、こう言った。「兄弟たち。私は、私の国民に対しても、先祖の慣習に対しても、何一つそむくことはしていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡されました。

Act 28:18 ローマ人は私を取り調べましたが、私を死刑にする理由が何もなかったので、私を釈放しようと思ったのです。

(1) 3 日の後

①パウロは直ちにユダヤ人たちとの対話を開始した。

②当時ローマには、相当数のユダヤ人がいた（1万人～5万人）。

③彼は、ユダヤ人の指導者たちを自分の家に呼び集めた。

- ④自分から会堂に行くことができなかったのであろう
- ⑤招く前に、彼らがパウロに敵対的でないことを確かめたはずである。
*エルサレムのユダヤ人のようなら、危険な状態になる。

(2) ユダヤ人たちを招いた目的

- ①まずユダヤ人に福音を伝えようとした。
*これは、パウロが採用した伝道の原則である。
- ②自分がローマに来た理由を説明しようとした。
*誤解を生む前に、自ら主導権を取って動いた。

(3) 17～20節は、使徒22～26章で起こったことの要約である。

- ①長い物語であったが、ルカはその要点をまとめてくれている。

2. 19～20節

Act 28:19 ところが、ユダヤ人たちが反対したため、私はやむなくカイザルに上訴しました。
それは、私の同胞を訴えようとしたものではありません。

Act 28:20 このようなわけで、私は、あなたがたに会ってお話しようと思い、お招きしました。私はイスラエルの望みのためにこの鎖につながれているのです。」

(1) 使徒22～26章の物語の要点

- ①律法に背いていないのに、エルサレムで囚人としてローマ人の手に渡された。
- ②ローマ人は自分を取り調べ、無罪なので釈放しようとした。
- ③ところが、ユダヤ人たちが反対したので、自分はやむなくカイザルに上訴した。
- ④自分は、同胞を訴えようとしたのではない。
- ⑤自分は、イスラエルの望みのためにこの鎖につながれている。

3. 21～22節

Act 28:21 すると、彼らはこう言った。「私たちは、あなたのことについて、ユダヤから何の知らせも受けておりません。また、当地に来た兄弟たちの中で、あなたについて悪いことを告げたり、話したりした者はおりません。

Act 28:22 私たちは、あなたが考えておられることを、直接あなたから聞くのがよいと思っています。この宗派については、至る所で非難があることを私たちは知っているからです。」

(1) ローマのユダヤ人たちは、パウロのことについてはよく知らなかった。

- ①エルサレムとローマのユダヤ人たちは、頻繁に交流していた。
- ②ローマのユダヤ人たちがパウロのことを知らないというのは、奇跡である。
- ③彼らは、意図的に「この道」について論じることを避けていた可能性もある。

*ローマからユダヤ人が追放されたという記憶が残っている。

Ⅲ. ユダヤ人たちとの2度目の会談（23～29節）

1. 23～24節

Act 28:23 そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。

Act 28:24 ある人々は彼の語る事を信じたが、ある人々は信じようとしなかった。

(1) 後日、より多くのユダヤ人たちがパウロの家に来た。

①パウロは、朝から晩まで語り続けた。

(2) パウロのメッセージの内容

①神の国のことを証した。

*メシア的王国のことである。

②ヘブル語聖書に基づいて、イエスがメシアであると、彼らを説得しようとした。

(3) ユダヤ人たちの反応

①ある人々は、信じた。

②ある人々は、信じようとしなかった。

2. 25～27節

Act 28:25 こうして、彼らは、お互いの意見が一致せずに帰りかけたので、パウロは一言、次のように言った。「聖霊が預言者イザヤを通してあなたがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。

Act 28:26 『この民のところに行って、告げよ。／あなたがたは確かに聞きはするが、／決して悟らない。／確かに見てはいるが、決してわからない。

Act 28:27 この民の心は鈍くなり、／その耳は遠く、／その目はつぶっているからである。／それは、彼らがその目で見、／その耳で聞き、／その心で悟って、立ち返り、／わたしにいやされることのないためである。』

(1) 別れ際に、パウロはイザ6：9～10を引用した。

①イザヤの時代、ユダヤ人たちは信じなかった。

②パウロの時代でも、ユダヤ人たちは信じなかった。

③今の時代でも、ユダヤ人たちの大半が信じようとしなない。

3. 28～29 節

Act 28:28 ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らは、耳を傾けるでしょう。」

Act 28:29 「パウロがこのようなことを語ったところ、ユダヤ人たちは大いに論じ合いながら帰って行った。」（底本に節が欠けている。この部分の異本による訳文）（新共同訳）

(1) これが使徒の働きのクライマックスである。

①ユダヤ人は福音を拒否した。

②福音は、異邦人に届けられる。

IV. 異邦人伝道（30～31 節）

1. 30～31 節

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(1) パウロが無罪であることは、公に認識されていたようである。

①彼は、丸 2 年の間、快適に暮らすことができた。

(2) 2 年間の伝道

①彼は、大胆に語った。

②ローマの官憲による妨げは、全くなかった。

③彼は、神の国を宣べ伝えた。

④彼は、イエスが約束のメシアであることを教えた。

結論

1. 使徒の働きの執筆プラン（使 1：8）

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(1) 福音伝達は、エルサレムから始まった。

(2) ペテロを中心とした使徒たちの伝道によって、福音はユダヤに広まった。

(3) ピリポの伝道によって、福音はサマリアに広まった。

(4) パウロの伝道によって、福音は地の果てまで広まった。

2. 使徒の働きの結末（使 28：30～31）

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(1) これが、7つの教会成長レポートの最後である。

①使 2：47

②使 6：7

③使 9：31

④使 12：24

⑤使 16：5

⑥使 19：20

⑦使 28：30～31

3. 神の国

(1) 使 1：3

Act 1:3 イエスは苦しみを受けた後、四十日の間、彼らに現れて、神の国のことを語り、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示された。

(2) 使 1：6

Act 1:6 そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」

(3) 使 28：23

Act 28:23 そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって、イエスのことについて彼らを説得しようとした。

(4) 使 28：31

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(5) 神の国とは、メシア的王国（千年王国）のことである。

①地上に文字通り千年王国が成就する。

②これは、ヘブル的希望である。

③パウロは、この希望のゆえに捕えられた。

4. 今も続くキリストの御業

(1) 使徒の働きのエンディングは、教会建設の業が継続していることを示している。

①普遍的教会の建設は、キリストの御業である。

(2) そのために、キリストは人間を用いる。

①使徒たち

②一般の弟子たち

③ペテロ（前半）

④パウロ（後半）

(3) パウロの生涯は、献身したひとりの人間が、どれほどのことを為すことができるかを教えている。

*次回 100 回目は、その後のパウロについて語る予定である。

「使徒の働きとパウロ書簡」

使徒 28 : 30～31

1. その後のパウロ

(1) 使 28 : 30～31

Act 28:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、

Act 28:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

①ローマでの 2 年間の軟禁生活の後、パウロはどうなったのか。

*2 年後に解放され、ローマを追放された。

*その後、巡回伝道を再開した（これを第 4 回伝道旅行と呼ぶ人もいる）。

*2 テモ 4 : 20 は、パウロが解放されて以降の状況を述べたものである。

2Ti 4:20 エラストはコリントにとどまり、トロピモは病気のためにミレトに残して来ました。

③教会史家エウセビオス（紀元 340 年頃死亡）は、こう記している。

*パウロは、解放されて後、伝道を再開した。

*ローマを 2 度目に訪れた際に投獄され、殉教の死を遂げた。

④初期の教会教父たちは、パウロがスペインを訪問したと書いている。

2. 使徒の働きとパウロ書簡関係

(1) 使 1 : 8

Act 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

①パウロは、福音を地の果てまで伝えたキリストの証人である。

②彼は、伝道しながら、諸教会や個人宛に手紙を書いた。

(2) パウロ書簡を執筆順に並べてみる。

①宛先、②執筆場所、③執筆の経緯、④内容

パウロ書簡を執筆順に並べ、内容を確認する。

1. ガラテヤ人への手紙

(1) 宛先

①ガラテヤ地方の複数の教会（ガラテヤ地方とは今のトルコである）。

(2) 執筆場所

①第1次伝道旅行の後、アンテオケで執筆したと思われる。

②タイミングは、エルサレム会議の前である。

③紀元 48 年頃

(3) 執筆の経緯

①パウロは、第1次伝道旅行でこの地方に複数の教会を設立した。

＊ピシデヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベの諸教会

②これらの教会を、ユダヤ主義者と呼ばれる人々が訪問した。

③パウロは、ユダヤ主義者の教えを論破するために、この書簡を書いた。

④ちなみに、ガラテヤ書は、宗教改革の土台となった書簡である。

(4) 内容

①キリスト者の自由の「マグナ・カルタ」（大憲章）だと言われる。

②3つのポイントがある。

＊個人的弁明：パウロの使徒職

＊教理的教え：信仰義認

＊実践的教え：キリスト者の自由

2. テサロニケ人への手紙第一

(1) 宛先

①テサロニケの教会

(2) 執筆場所

①第2次伝道旅行のときに、パウロはコリントに18ヶ月間滞在した。

②その間に、コリントからこの書簡を書き送った。

③紀元 51 年頃

(3) 執筆の経緯

①パウロは、第2次伝道旅行でテサロニケを訪問し、そこに教会を設立した。

②ユダヤ人による迫害のために、そこを急に去ることになった。

③相当な量の教理を教えたが、まだ完了したわけではなかった。

④若い教会を励まし、教育するために、2通の手紙を書いた。

(4) 内容

①個人的な内容

＊教会の誕生と成長の経緯

②実践的教え

＊携挙と終末への備え

＊教会生活

＊個人的生活

3. テサロニケ人への手紙第二

(1) 宛先

①テサロニケの教会

(2) 執筆場所

①第2次伝道旅行のときに、パウロはコリントに18ヶ月間滞在した。

②その間に、テサロニケ教会宛に2つの書簡を執筆した。

③紀元52年頃

(3) 執筆の経緯

①第一の手紙を届けた人が、テサロニケ教会の情報を持ち帰った。

*その中には、よい情報と悪い情報が含まれていた。

②そこでパウロは、第二の手紙を執筆する必要性を覚えた。

③第二の手紙は、約1年後に書かれたと思われる。

(4) 内容

①迫害に遭っている人たちへの励まし

②終末に関する神の計画

*聖徒たちは終末論に関して混乱していた。

*「主の日」（患難時代）はまだ来ていない。

③実践的教え（教理の適用）

*無責任な生き方をする者たちがいた。

4. コリント人への手紙第一

(1) 宛先

①コリントの教会

(2) 執筆場所

①第3次伝道旅行のときに、パウロはエペソに3年間滞在した。

②その間に、コリント人への手紙第一を執筆した。

③紀元55年頃

(3) 執筆の経緯

①コリントは、アカヤ州の首都、帝国内で4番目に大きな町、墮落した町。

②コリント教会から使いが来て、パウロの助言を求めた。

③この手紙は、地域教会が直面する諸々の課題について書かれた書簡である。

④パウロは、位置的聖化を、实际的聖化に高めようと努力した。

(4) 内容

①罪の叱責

*分裂、罪に対する懲戒、裁判の問題、性的放縱の問題

②質問に対する回答

*結婚、偶像に捧げた肉、礼拝における秩序

*聖霊の賜物、復活、献金

5. コリント人への手紙第二

(1) 宛先

①コリントの教会

(2) 執筆場所

①第3次伝道旅行のときに、マケドニア（恐らくピリピ）で書かれた。

②紀元 57 年頃

(3) 執筆の経緯

①テトスは、第一の手紙が送られて以降のコリント教会の情報を持って来た。

*良いニュース：罪を犯した人は霊的に回復した。

*残念なニュース：エルサレムの貧しい聖徒たちに献金を送っていない。

*悪いニュース：偽教師たちが、パウロの使徒職を否定している。

②そこでパウロは、第二の手紙を書いた。

(4) 内容

①懲戒を正しく実行したことへの褒め言葉

②パウロの動機を疑う者たちへの応答

③エルサレムの聖徒たちへの献金

④パウロの使徒職を疑う者たちへの応答

6. ローマ人への手紙

(1) 宛先

①ローマの教会

(2) 執筆場所

①第3次伝道旅行の終りごろ、コリント滞在中（使 20：2～3）に書かれた。

②紀元 57 年頃

(3) 執筆の経緯

①パウロは、エルサレム教会に異邦人の諸教会からの献金を届けようとしていた。

②その後で、スペインに行こうと思っていた。

③3つの執筆目的

*自らの神学をまとめるため（最初の組織神学の書である）

*スペイン伝道の支援を求めるため

*ローマ教会の中にあったユダヤ人信者と異邦人信者の葛藤を解決するため

(4) 内容

- ①福音とは何か。
- ②罪人は、どのようにして義とされるのか。
- ③義認は、どのような祝福をもたらすのか。
- ④信者はなぜ、律法主義に陥るのか。
- ⑤どのようにしたら清い生活を送ることができるのか。
- ⑥ユダヤ人は、神から見捨てられたのか。
- ⑦では、いかに生きるべきか。

7. エペソ人への手紙

(1) 宛先

- ①エペソの教会（回覧書簡である）

(2) 執筆場所

- ①パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ②紀元 60～61 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①獄中書簡と呼ばれるものが、4つある。
 - *エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモン
- ②パウロは、獄中にあって4つの重要な書簡を書いた（時間的余裕があった）。
- ③エペソ人への手紙は、教会論の書である。

(4) 内容

①教理的部分

- *教会は、新しいひとりの人である。
- *教会は、奥義である。

②実践的部分

- *信者は、光の子らしく歩むべきである。

8. ピリピ人への手紙

(1) 宛先

- ①ピリピの教会

(2) 執筆場所

- ①パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ②紀元 60～61 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①ピリピの教会は、エパフロデトに「贈り物」を託して、パウロに送った。
- ②エパフロデトは、パウロを支えるためにそこで働き始めたが、病気になった。
- ③エパフロデトの病気が治ったので、パウロはピリピに彼を送り返す。
- ④その際、パウロはこの手紙を書いて、彼に託した。

(4) 内容

- ①試練の中にある喜び
- ②奉仕の中にある喜び
- ③信じることの中にある喜び
- ④与えることの中にある喜び

9. コロサイ人への手紙

(1) 宛先

- ①コロサイの教会

(2) 執筆場所

- ①パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ②紀元 60～61 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①エパfrasが獄中のパウロを訪問し、教会の現状を伝えた。
- ②コロサイ教会には、教理的逸脱があり、早急に対応する必要があった。
- ③教理的逸脱とは、後に「グノーシス主義」と呼ばれる異端の原型である。

(4) 内容

- ①聖書的キリスト論の宣言
- ②聖書的キリスト論の擁護
- ③聖書的キリスト論の実践

10. ピレモンへの手紙

(1) 宛先

- ①ピレモン

②私信の形をとっているが、内容は教会（コロサイ）に宛てられた公式の手紙である。

(2) 執筆場所

- ①パウロがローマの獄中にあった時に書かれた書簡である。
- ②紀元 60～61 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①パウロは獄中で、ピレモンの奴隷であったオネシモをキリストに導いた。
- ②ところがオネシモは、逃亡奴隷であった。

③パウロは、ピレモンがオネシモを兄弟として受け入れてくれるように依頼した。

(4) 内容

①ピレモンへの依頼

②パウロとオネシモの関係

③負債は支払うという約束

11. テモテへの手紙第一

(1) 宛先

①テモテ

(2) 執筆場所

①ローマの獄から解放されて以降に、ピリピからこの手紙を書き送った。

②紀元 63～66 年頃

(3) 執筆の経緯

①2 通のテモテへの手紙とテトスへの手紙を総称して、「牧会書簡」と言う。

②ローマの獄舎から解放されたパウロは、ローマ退去を命じられた。

③パウロは、ルカとテモテを伴ってエペソを訪問した。

④エペソでは、パウロが予期した通りのことが起こっていた。

⑤パウロは、エペソ教会を牧するためにテモテを後に残し、ピリピに向かった。

⑥パウロは、テモテを励ますために、この手紙を書いた。

(4) 内容

①若い牧師への助言

②偽教師の扱い

③教会の指導者の資格

④自らの霊的養い

⑤禁欲的生活からの解放

⑥教会内の人間関係

12. テトスへの手紙

(1) 宛先

①テトス

(2) 執筆場所

①マケドニアのどこか（ピリピ？）

②テモテへの手紙第一の後に書かれた。

③紀元 63～66 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①テトスは、異邦人信者で、パウロの同労者となった人物である。
- ②パウロは彼に、クレテの教会を指導する任務を与えた。
- ③伝承によれば、彼はクレテ島のゴルティナで監督となり、94 歳で召された。

(4) 内容

- ①長老の任命
- ②教理の実際生活への適用
- ③神の恵みによるクリスチャン生活の勧め

13. テモテへの手紙第二

(1) 宛先

- ①テモテ

(2) 執筆場所

- ①ローマの獄中（2 回目の獄中生活）
- ②テトスへの手紙の後に書かれた。
- ③紀元 67 年頃

(3) 執筆の経緯

- ①自分の死期が近いのを感じながらテモテに宛てて書いた別離の手紙である。
- ②パウロは、エペソで奮闘しているテモテを励ますためにこの手紙を書いた。

(4) 内容

- ①テモテへの愛
- ②信者を弟子化する方法
- ③苦難に対する心構え
- ④みことばを宣べ伝えよという命令

結論

(1) 2 テモ 4 : 6～8

2Ti 4:6 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。

2Ti 4:7 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

2Ti 4:8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。